

大船渡の林野火災の原因は乾燥だけなのか？－人間の身勝手さと里山－

この原稿を書いている2025年3月1日現在、岩手県大船渡市周辺では、林野火災が拡大し、死者1名という痛ましい状況となっている。また、日本各地でも同様の林野火災が頻発している。この原稿が印刷される頃にはどうなっているであろうか。

さて、大船渡の火災の原因は、メディアの解説によれば「異常な乾燥」とされている。果たして、それだけであろうか。原因を私なりに考えてみた。

私は1979年から福島県内の地質調査を行ってきた。その中で、里山に人間活動の痕跡を数多く見てきた。主な調査地である磐梯火山では、稜線や谷の奥まで、「かつての」山道が張り巡らされていた。おそらく薪取りや山菜・キノコ採りに使った道と考えられる。また、湧水には山葵が生えていた。さらに地球科学に掲載された「明治神宮」(2023年77巻1号)や「義敷温泉」(2024年78巻1号)もあった。人々が里山と共に生きてきた証拠である。

2003年、安達太良火山の前ヶ岳の調査の際、山麓から続く尾根には土塁があった。地元の大玉村役場職員によれば「防火帯」とのことであった。私の調査時点でも、土塁は崩れ草木が繁茂し、防火機能は失われていた。

2006年に調査した福島市水原の里山では、各沢に「炭焼き窯の跡」があった。周囲は「椎の森」である。状況から「毎冬に沢周辺の椎の木を切って木炭を生産し、翌年は隣の沢で行う」、このローテーションを繰り返していたと考えられる。この作業で、椎の森の「伐採と再生」が繰り返されてきた。ところが、2006年ころは、椎の木は幹の直径20～25cmもあり一部は枯れて腐っていた。30～40年前から、炭焼きをしなくなったと推定される。また、「道幅が軽トラ1台分ほどの山道」が何本もあった。おそらく営林署のものであろう。しかし、40年ほど前から、地方の営林署が廃止され、里山の管理がなされなくなった。1970年代には猪苗代にも営林署があったが、廃止され前橋営林局に吸収された。

さらに、戦前からの国策で、里山への「杉の植林」が

推進された。童謡の「お山の杉の子」にも表れている。これも「植林と伐採」が繰り返されてきたが、1980年ころには輸入木材に価格競争で破れ、放置されている。この杉も巨木化し、根元には「枯れた枝や葉」が大量に溜まっている。

このように、かつての里山は資源の宝庫で、人々は里山と共存していた。ところが高度経済成長とともに、里山の木材資源は石油製品に取って代られ、山里の人々は都会へ流れた。このため里山・山里は荒れ放題となった。そこに野生動物が住み着き、増えた野生動物が都会へと進出する。すべて人間のご都合主義の結果である。

里山自体は、柴刈もされず、薪取りもなく、手入れもなく、枯木や枯葉だらけで荒れ放題となった。すなわち里山は資源の山から「可燃物の山」に変わった。また、かつては、炭焼きや杉の出荷で順に樹木が伐採され「自然の防火地帯」ができていたが、それもなくなった。さらに、延焼防止に作られた「防火帯(防火土塁)」も管理されずに、その機能を失った。

この状態で、冬の太平洋沿岸の異常乾燥、春先の大風、そこに火が付いたらどうなるであろうか。想像に難くない。すべて人間の身勝手から生じている。発火の原因は、野焼き・タバコなどの人間の火の不始末だけではない。異常乾燥ならば自然発火も考えられる。

現在の都市への野生動物の出没、林野火災など、その多くは放置された里山・山里から生じている。早急に里山・山里をどうするか策を講じなければならない。放置し続ければ、これからも問題が増大していくであろう。今、ご都合主義の人間に「自然からの鉄槌」が下されて始めている。最後に、大船渡および他の地域の林野火災の早期鎮火を願う。

(2025.03.01 福島支部 千葉茂樹)

(04.01 追記) 本稿投稿後、ネットニュースに記事が掲載された。写真を多く使って説明し、また私の意見もある。ご覧いただきたい。キーワード「NetIB 千葉茂樹」。

そくほう No.820

2025年5月1日発行 (毎月1回1日発行)

編集 地学団体研究会全国運営委員会事務局

〒171-0022 東京都豊島区南池袋4-16-6 古峯ビル402

Email: chidanken@tokyo.email.ne.jp

郵便振替 00160 - 2 - 144318 地学団体研究会

発行 地学団体研究会

TEL: 03 - 3983 - 3378 FAX: 03 - 3983 - 7525

<https://www.chidanken.jp>